国内外で相次ぐコンテナ漂流

高潮リスク 教訓生きず

専門家「甘い想定、対策不十分」

「走って逃げる後ろから波が追いかけてきた」―。記録的な高潮被害を出した台風21号。市民は想像を超えた事態に声を震わせた。コンテナ流出対策をはじめとする防災対策の不備が被害の拡大を招き、専門家は「高潮のメカニズムや被害への認識が不十分」と指摘。想定を上回る高潮は今後も起こり得ると警鐘を鳴らす。（1面参照）

台風21号の高潮で海に流れ出たコンテナ＝4日、神戸市東灘区

神戸市東灘区の六甲アイランド（六アイ）からはコンテナ43個が海に流出した。半数以上が芦屋市や西宮市まで漂着。護岸のフェンスをなぎ倒し、陸地に乗り上げた。

「濁った水が壁を突き破って事務所に流れ込んだ。一瞬で膝ほどまで増水した」と話すのは、六アイの物流会社社員岡田尚也さん（40）。台風が上陸した4日午後、事務所沿いの道路は川に様変わりし、いくつものコンテナが流れていた。

コンテナの漂流は2009年10月、愛知県豊橋市の三河港でも起きた。台風による高潮で浸水し、漂流したコンテナ136個がフェンスを押しつぶした。

「ここまでの高潮は想定していなかった」（愛知県の担当者）。事業者側にも注意喚起はしていなかったという。その後、固定具の装着などの対策を徹底し、台風接近時には実施状況を港湾管理会社と確認することを申し合わせた。

神戸市担当者は、防潮堤の高さは高潮で想定する潮位よりも高いとするが、コンテナが置かれる荷役施設にはその性質上、高い防潮堤を設けるのは不可能だ。にもかかわらず、神戸市は地域防災計画で、高潮の被害を「被害が広がりやすい」と記述するにとどまる。

さらに近年では、高潮が津波のように押し寄せる事例が海外で相次いでいる。気圧低下による海水の吸い上げだけでなく、強風による海岸への吹き寄せ効果が注目され、高潮の脅威は潮位上昇にとどまらないとの見方が出ている。

19日に初会合を開いた国が設置する大阪湾の高潮対策検討委員会で、トップを務める青木伸一・大阪大大学院教授（海岸工学）は「想定よりダイナミックな高潮現象が起きた地域がある。潮位の上昇だけではなく、高波や強風の作用も分析した上で対策を考える必要がある」と強調する。現地調査した早稲田大の柴山知也教授（海岸工学）は「従来の高潮を想定した備えだけでは被害を防ぎきれない。行政はリスクを把握し、対策を講じる必要がある」と述べた。（金 晃革、那谷享平）

神戸新聞
2018年（平成30年）9月21日 金曜日